

Doshisha University Center for the Study of the Creative Economy

Discussion Paper Series No. 2018-03

東日本大震災からの復興とまちづくり
～気仙沼市唐桑町を事例に～

松野 光範



Discussion Paper Series

東日本大震災からの復興とまちづくり

～気仙沼市唐桑町を事例に～¹

松野光範²

はじめに

気仙沼市を訪れたのは、2013年8月末に大学間災害ボランティアネットワーク主催のボランティア活動にゼミ生の引率で参加したのがきっかけである。その当時は、震災遺構として保存するか否かの市民投票の実施により撤去が決まった「共徳丸」の撤去工事にかかろうという時期でもあった。学生の率直な印象は、2年半が経過したにもかかわらず、復興はほとんど進んでいないというものであった。

その後、2015年8月まで夏休み、春休みごとに1週間程度学生に引率し気仙沼にて活動を行ってきた。この間に注目したのは、ケセン地区では獅子舞ならぬ虎舞が盛んであることであった。虎は千里を走るとの言い伝えがあり、航海の安全や災難除けのために舞った虎舞が郷土芸能として市民に親しまれていることに興味をひかれたのである。なぜ獅子ではなく虎なのかという疑問から唐桑観光協会に出入りするようになった。そして、虎舞だけではなく大漁唄い込み、浜甚句、七福神舞などの郷土芸能や神様あそばせなどの伝統的な行事が残されている地区であることがわかった。

さらに、2013年からは「唐桑ものがたり」という、1300年前に室根山に熊野神を勧請した歴史をテーマにした郷土芸能劇が新たに試みられていることに興味をひかれ、唐桑に深くかかわることとなった。

本論では、これまでの気仙沼市での調査活動の一部として、少子高齢化と過疎という日本の共通の課題を抱えながら地震と津波に襲われた唐桑地区の復興とまちづくりについて検討を行う。

1. 気仙沼市唐桑町について

気仙沼市唐桑町は、気仙沼市・本吉町との広域合併により成立した町で、宮城県の最北

¹ 本論文は日本学術振興会の「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（H27.10～H30.9）」の成果の一部である。

² 同志社大学ライフリスク研究センター嘱託研究員

部に位置し、太平洋に突き出た半島でほとんど平地はなく、尾根伝いの県道が開通するまでの気仙沼との交通手段は船であり、比較的地域固有の文化が守られている地区でもある。本章では、唐桑地区の概要と被災の状況および、被災後の仮設住宅に分かれて住む氏子をつなぐ役割を果たした早馬神社の例大祭について検討する。

(1) 唐桑町の概要

気仙沼市唐桑町は、宮城県の最北東端に位置し、東は太平洋に突き出し、北は岩手県陸前高田市に接して、三陸のリアス海岸の一翼を形成している。町の名前の由来は、唐の国から桑の木を満載した船が嵐で遭難し、積荷の桑の木が神止浜(かどまりはま)に流れ着いた事から唐桑と呼ばれるようになったと伝えられている。三方を海に囲まれた唐桑半島は、遠洋漁業が盛んで、最盛期には1600人も遠洋漁業の漁船員(町内全世帯の70%)がマグロを追い世界の海で活躍し、今でも800名の人に従事しているという。かつては1年近くを洋上で稼ぎ、家族を養うとともに唐桑御殿といわれる入母屋式の大きな家を建てるのが男たちのロマンであった。その間留守を預かる家族は、大漁と航海安全を願い様々な形の郷土芸能や習慣として今でも日々の暮らしの中に残している。唐桑はまさに鯨を追い、鯉節の製造技術や醤油の醸造など当時の先端技術を伝えながら北上した紀州の民が故郷とよく似た地形の豊かなリアスの地に住み歴史を重ねてきたのである。これを漁業面で見ると、定置網やカツオの溜め釣り漁法を行っていた豊かな近海の資源の減少を補うために、造船技術や操船技術の進歩に支えられ世界の海へ漕ぎ出していった。その結果、相手国の資源の減少に伴う自国資源保護のための200海里の経済水域設定や、1970年代の2度のオイルショックに加え1982年には国連海洋法条約が採択されたことにより減船を余儀なくされた。

このような市場環境の大きな変化がある一方で、牡蠣やホタテの栽培漁業が盛んであり海の富栄養化への取り組み、たとえば畠山重篤氏が主宰するNPO法人「森は海の恋人」の植林による環境保護活動に熱心な地区でもある。

2006年(平成18年)3月31日、気仙沼市と合併し唐桑の名前を残し気仙沼市唐桑町となった。人口は、2000年10月1日の国勢調査時は人口8841人であったが、現在は表1にあるように6,286人と過疎化に悩む地域でもある。

さらに高齢化率(人口に占める65歳以上の人口の比率)は、気仙沼市全体が35.29%であるのに対し、①大島46.79%、②小原木39.70%、③唐桑38.80%、④中井38.83%と、唐桑は2位から4位を占める気仙沼の中でも高齢化の進んだ地域でもある。

表 1：気仙沼市の人口と世帯数

	男	女	合計	世帯数
気仙沼市計	31,862	33,055	64,917	24,139
旧気仙沼市	23,935	24,728	48,663	18,812
旧唐桑町	3,062	3,224	6,286	2,039
旧本吉町	4,865	5,103	9,968	3,288

出展：平成 27 年国勢調査の人口・世帯数の速報より

(2) 唐桑地域の被災状況

唐桑地域の被災状況は、表 2 にあるとおりであり、全体の 30.9%にあたる 2,333 の家屋が被害を被った。気仙沼全体での被害は、15,815 棟であり市全体の 14.75%にあたる。図表 1 による唐桑の人口比が 9.68%、世帯比が 8.45%であり、他の地区に比べ被害が大きいことがわかる。

平成 21 年度の水産白書は、「漁村の立地をみると、漁港背後集落の 3 割が急傾斜地に位置し、集落背後地形についても 5 割が崖や山が迫る狭隘な地形となっており、大規模地震や津波等の災害に対し脆弱な立地にあり生活基盤整備も、小都市と比較しても立ち遅れている」ことを指摘している。

表 2：唐桑地域の家屋の被害状況

地区名	町名	全壊	大規模 半壊	半壊	一部 損壊	計	地区の棟数に占める被害の割合
中井	崎浜、松圃、中井、小鯖	211	9	19	98	337	14.3%
唐桑	中、鮎立、舞根、宿、石原	989	54	72	114	1,229	34.2%
小原木	只腰、館、大沢	664	26	15	62	767	47.8%
合計		1,864	89	106	274	2,333	30.9%

平成 23 年度第 4 回唐桑地域協議会資料より作成

この狭隘な地形が被害を大きくするとともに、その後の仮設住宅の設置数や設置の制約条件となった。2,333 棟の被災に対し、仮設住宅は 311 棟しか用意できなかった。したがって、多くの被災者が唐桑以外、特に気仙沼市内の仮設住宅、遠くは岩手県一関市室根町の仮設住宅や親類縁者を頼って避難生活を送らざるをえなかったのである。

表 3：唐桑地区の仮設住宅

仮設住宅名	設置数	備考
旧唐桑小学校跡地	84	
小原木小学校校庭	30	
福祉の里 A	35	広田湾を眺める高台の唐桑保険 福祉センター燦三陸館の緑地や テニスコートなどを利用
福祉の里 B	45	
福祉の里 C	19	
漁火パーク	21	早馬山の中腹の見晴らし台
中井小学校校庭	20	
小原木中学校校庭	57	
計	311	

出典；気仙沼市唐桑総合支所提供資料より筆者作成

発災当時、気仙沼市会議員であった戸羽氏にインタビューを行った。唐桑半島は、①リアス海岸は海から切り立った地形であり、海岸に近い平地が少なく一般の住宅を確保するのも困難である。②そのため広い公有地を保有おらず1ヶ所に数百戸単位の仮設住宅を建設することができなかった。したがって、③小学校の運動場等に数十戸単位の仮設住宅を建設した（表3にあるとおり8か所で311戸建設）。その入居の優先順位は、④介護を要する人や、老人の一人ぐらしなどの緊急度の高い人たちを優先したものであった。以上のような理由からコミュニティ単位での仮設入居は実現できなかったというのである。

これらのことなどから、東日本大震災は、日本社会の共通の課題である過疎化・少子高齢化が進んだ崖や山が迫る狭隘な地区で発生した災害であったといえる。このような厳しい環境にありながら、瓦礫の片づけが発災の半年後9月には終了し、休漁補償の制度を断り、各地より種牡蠣や用具の支援を得て一早く養殖を再開するなど唐桑地区の復興は他の地区よりも早かったといわれている。

(3) 分断された人々をつなぐ祭り～早馬神社例大祭

早馬神社のある、宿浦（しゅくうら）は唐桑地区で最も被害の大きかった地区で、64世帯のうち54軒が津波により流出した。したがって、氏子である神社下の民家のほとんどが流され、高台の神社の境内も浸水し境内には自動車が打ち上げられ、境内の柱には津波の高さの記録や津波を記録する写真や石碑が立てられている。

古くから「早馬さん」「権現様」と親しまれ、海上・交通安全、方除、厄除、必勝の信

仰が中心となっている。地区としては、町の中心部である気仙沼総合支所や商工会・郵便局のあるところから西にやや下ったところで、唐桑でも人口が一番集積した地区である。建保5年（1217年）に梶原景實により創建された歴史のある神社である。

神幸祭（しんこうさい）は例年10月第1日曜日に行われ、海上神輿船渡御、奉納演芸が行われ、境内では解禁されたばかりの唐桑産のカキ祭が開催される。被災した2011年10月、例年通り神幸祭が挙行された。

禰宜の梶原氏によると、例大祭の実施には勇気がいったとのことである。震災後、本当に例大祭を行ってもよいのかと躊躇したそうで、「秋の開催であったことが幸いしたのではないか、夏の祭りであればできなかつたかもしれなかつた」という本音をお聞きした。ただし、神輿は小鯖、鯖立、宿浦地区の例年のルートに加え、トラックに乗せ氏子が分かれて住んでいる仮設住宅を全部回ったそうである。さらに船渡御は、宿浦からではなくトラックで神輿を小鯖に移動し、そこから船に乗せ実施した。今回の津波では、唐桑地区の7割の船が流出したが、そのほとんどがいわゆる磯船であり、船渡御に使用される船は比較的大型で、そのほとんどは津波の際に沖出しにより被災を免れたという。

町内を回った神輿は、漁船に積みこまれ10数艘のお供船を従に唐桑半島の先端御崎（おさき）へ向かう。御崎沖にて祈祷を行い、全漁船が輪を描きながら3周した後、宿浦港へ帰ってきて禊を行う従来の祭りが復活した。境内では、宿打囃子獅子舞保存会による奉納太鼓、気仙沼民謡同好会による神振奉納演芸、出店がでるとともに解禁されたばかりの新鮮な牡蠣の試食・即売が行われる牡蠣祭が例年通り開催されたのである。

以上のことから、祭りは地域が安定している時にのみ開催されるのではなく、分断された地域の人々をつなぐ役割を担い、地域を再建するための欠かせないものであることが指摘できる。その意味では唐桑に伝えられる大漁唄い込みや虎舞・七福神舞・浜甚句などの郷土芸能もまったく同じ機能を果たしているものと考えられる。

また、この祭りでは四家と呼ばれる人たちが祭礼の行列の先頭を固めることが儀礼となっており、この四家を中心に唐桑の歴史が刻まれてきたのである。したがって、鈴木、畠山、熊谷などの名字が多く、本家・分家の関係を明らかにするために屋号を名乗ったということである。今でも盆と正月には本家を訪問する習慣は残っているとのことである。また、この四家が地域のもめごとなどの仲裁など集落の長としての役割りを担っていたようである。

「神様あそばせ」という行事が引き継がれている。年の始め、地域ごとに各家々の人達

が集まり家族、地域の無事を祈る祈祷を執り行い、神職の講話、後に御神酒、お茶、茶菓子、お煮しめなどの手料理を味わいながら家を守る女性が神様と一体となってその時間を過ごすという。唐桑の男たちは遠洋漁業など海上の仕事に従事し女性が家を守り、安全を祈る役目を担っていた。したがって、ほとんどの参加者が女性で、年末には一年の無事を感謝し、報賽の祈祷を行うという唐桑の習慣、伝統行事が残っている。

2. 震災復興の取り組み

唐桑地区の復興に着目したのは、学生を主体とするボランティアの活発な活動であった。当初は都会の若者が歴史のある地区へ支援に入り、彼らが触媒となり復興のスピードが加速したとの仮説をもとに調査を開始した。何度も地元の人達を訪問し、インタビューを重ねるにつれ単純な発想では説明しきれないという結論に達した。以下、からくわ丸の活動、唐桑臨海劇場とまちづくりカンパニーおよびこれらをささえた地元学について検討する。

(1) からくわ丸の活動

「からくわ丸」の活動の起点になったのは、元代表の加藤拓馬氏が Friends International Work Camp³の被災地支援活動要員として唐桑地区に着任したのがきっかけである。加藤氏は学生時代に中国でのワークキャンプに参加しており、その経験をかわれ卒業の年に内定企業に採用延期の了解をとりつけ1年間の予定で唐桑に着任したという。

そこで彼が直面したのは、ボランティアをしたい人と支援を受けたい人のアンマッチであった。これは災害のたびに指摘される事項で、この課題を解決するために FIWC 加藤君と栃木ボランティアネットワーク上田君が代表となりボランティアネットワーク「唐桑ボランティア団」を設立しニーズとシーズを調整する機能を発揮したのである。その結果、がれきの撤去という当初の目的は、9月には解消されたのである。その結果、FIWCの活動は2012年3月に終了したという。

加藤氏の行動はこれにとどまらず、新たな問題を発見したことにある。彼は自身のブログの中でコミュニティのひび割れという刺激的な表現を用いている。よそ者から見た唐桑

³ FIWCとは、フレンズ国際ワークキャンプ (Friends International Work Camp) の略称。FIWCは現在、関東、東海、関西、広島、九州の委員会があり、本部支部の関係はなく、すべてが兄弟委員会それぞれの責任で活動を展開。FIWC 関東の HP より <http://fiwc.jp/profile.html>

のよさという視点から、コミュニティペーパー（フリーペーパー）「からくわ未来予報誌 KECKARA けっから。」を発行し町内に配布した。これは、唐桑の人たちに自分たちの住むところについて再認識してもらい、すなわち自分たちのまちのよさを気づくきっかけを提供したといえる。

唐桑に I ターン移住した 5 人を中心にまち歩きを開始した。その基本になったのは水俣で地元学を創始した吉本哲郎氏に会い「地元学」手ほどきを受けたことである。I ターン者を含め 20 名くらいのメンバーが地元の人案内で地域を回る。その結果をワークショップで地元の人達に報告をする。その結果、地元の人には外来者の目を通して地元の価値を知る、すなわち再発見・再認識する。つまり、自分たちが当たり前とっていたことや見慣れた風景に価値があることを知る気づきのきっかけとなったのである。ただし、このよそ者の視点を受け入れる要因として指摘できるのは、後述の臨海劇場やまちづくカンパニーの活動に参加した人たちの存在が大きいと考えられる。

もう一つの要因は、唐桑出身の鈴木重雄氏の存在である。氏は、東京商科大（現 一橋大）の学生だった昭和 10 年にハンセン病の宣告を受け岡山愛生園に入園。園内では偽名の「田中文雄」として 30 年を過ごしたが、在園当時から故郷唐桑の発展のために活動し、唐桑の国立公園編入、国民宿舎の誘致などで蔭ながらたいへんな貢献した。その後、FIWC 関西が奈良に「交流（むすび）の家」を建設するワークキャンプに参加し各地で建設資金カンパとハンセン病の正しい理解を訴えてきた。社会復帰したのち、町民の要請を受け地元の唐桑町長選挙に立候補。結果は惜しくも破れたが、後に社会福祉法人「洗心会」を設立し、唐桑や気仙沼で知的障害者入所施設「高松園」「第二高松園」、通所施設「夢の森」ほかいくつもの施設を運営している。これらの一連の活動を FIWC が支援をし、震災の時に加藤氏を派遣したことに繋がったのではなかろうか。

現在の「からくわ丸」の活動は、I ターンメンバーに加え地元の若者が加入し、現在の代表は地元出身の若者である。代表の立花氏は地元企業に勤務する若者である。東京での発表会の際に地元メンバーから聴取したのは、「これまで地元の先輩（高齢者）との交流がなかった。震災後、「からくわ丸」のメンバーとしてさまざまな活動を行ってきた。活動の対象の子供たちを通じ、これまで接点のなかった先輩たちと知り合うことができた」という言葉に象徴されるように、いわゆる年長者が中心の社会に対し、風穴（新しい関係）開けたように思える。

しかしながらリーダーの加藤氏に、警備会社の協力を得て一人暮らしの老人の見守りビ

ジネスを提案したが、福祉はやりたくないとの回答であった。その後、自身の意思を実現するために市議員への立候補を打診したが、まだまだ自分には荷が重いという回答であった。唐桑で自立することもさることながら、彼らがめざしているのは自己実現などの精神的な充足感を重視しているかのように見え、「地域おこし協力隊」や「地域活性化支援員」に応募する人たちとは明らかに異なっているように思える。

(2) 唐桑臨海劇場とまちづくりカンパニー

かつての唐桑は海の資源に恵まれた豊かな町であった。それがいつの日からか魚はいなくなり、それを追って漁師の航海も長期化、まちから徐々に活気が失われ、人口の流出が続いた。

1987年10月31日町民体育館で舞台美術の第一人者妹尾河童氏⁴を招き講演会が開催され、当時気仙沼のまちづくりに関わっていた石山修武氏⁵もゲストとして招かれ、翌日慰労のための外洋遊覧に招いた。その際、小鯖の長年使われていない鰹節工場を見た妹尾氏が「劇場にいいね」と発し、石山氏が「今から準備すれば、来年夏にはやれるね」と応じたのが唐桑臨海劇場への発端であったという。

漁業資料館「まんぺい屋」計画のため定期的な気仙沼を訪れていた石山氏を囲み、年明け早々準備会がもたれた。寒い中、30人近い若者が知恵を寄せ合い話し合いは每晚遅くまで及んだ。2月の会合では石山氏より「黒テント」⁶招聘の提案があった。黒テントについて知らない実行委員は「水産地域シンポジウム」以来のつきあいである結城登美雄氏にアドバイスを受け、さらに黒テント創設者の1人である津野海太郎との懇談の場を持つことが出来、劇団の活動、とりわけワークショップといわれる地元の人たちと作る即興劇の話に引き込まれていた。

その後、石山氏より大漁旗を使用した劇場のプランが提示され、6月になり設計図が届き、実行委員が1軒1軒訪ねて大漁旗の提供を依頼したそうである。その大漁旗を体育館で縫い合わせ、さながら大漁旗のテントで覆われた劇場が誕生した。1988年8月3・4・5日の3日間にわたり開催された唐桑臨海劇場は成功裏に終了した。

⁴ グラフィックデザイナー・舞台美術家・エッセイスト・小説家

⁵ 建築家・早稲田大学理工学部名誉教授。1995年気仙沼リアスアーク美術館の設計で日本建築学会賞作品賞受賞するなど気仙沼市、唐桑町との縁が深い。

⁶ 劇団「黒テント」は、唐十郎の「状況劇場」、寺山修司の「天井桟敷」とともに、60年代後半～70年代前半のアングラ演劇ブームを代表する劇団であった。

もう一つの特徴は、これを支えた地元のメンバーである。表4にあるように19才から42歳までのさまざまな職業に従事する人たちが実行委員となり唐桑臨海劇場を支えたのである。

表4：実行委員会メンバーの職業と年齢・性別

歯科医 (37才・男)	ブティック経営 (33才・男)	旅館経営 (37才・男)
ホテル経理課長 (33才・男)	役場職員 (29才・男)	漁協職員 (37才・男)
信用金庫職員 (21才・女)	美容師 (19才・女)	看護婦 (26才・女)
商工会職員 (27才・男)	電気店経営 (35才・男)	大工 (29才・男)
米屋 (37才・男)	トラック運転手 (37才・男)	塗装業 (42才・男)
観光協会職員 (26才・男)	水産加工販売 (31歳・男)	漁業経営 (36歳・男)
自動車会社員 (28才・男)	税理士 (38歳・男)	保母 (26才・女)
水道店経営 (25才・男)	喫茶店経営 (33才・男)	看護学生 (19才・女)
スポーツ店経営 (36才・男)	ガス・石油販売 (41才・男)	農協職員 (33才・男)
無線局勤務 (35歳・男)	ガソリンスタンド勤務 (32歳・男)	国民宿舎勤務 (25才・男)
縫製工場勤務 (19才・女)		

出典：「'88唐桑臨海劇場」p39.

後に町長になった実行委員長の佐藤氏、副実行委員長で後に仙沼市会議員になり現在は崎浜自治会長や崎浜大漁唄い込み事務局長の戸羽氏、ユースホテルを経営し震災後のボランティアの受け入れ等に尽力した三上氏は、現在唐桑観光協会長を務めている。

1989年3月発行の唐桑町商工会地域ビジョン10年計画「唐桑ものがたり」では、この成功の要因を①他の町では観ることのできないオリジナリティを持っていたこと、②大漁旗という都市にはない資源を発見したこと、③それらのものがたり化に成功したことの3点に整理している。そして、「臨海劇場」のようないくつかの小さなイベントを唐桑町内部のため、そして外部の観光客のために実施し唐桑を活性化する。異なる目的のイベントを、町の内部・外部両方へ向けて10年間重層的に実施していったとき、その過程には、他の町にはないノウハウとネットワークが生まれ、それらにより唐桑を魅力的な町となり、3次産業をベースにした、新しい産業が生まれることも夢ではないとしている。

10年計画の「唐桑ものがたり」の発表を受け、1989年に臨海劇場の実行委員長であった佐藤氏が中心になり、まちづくりカンパニーを設立した。最初に取り組んだのが「お魚クラブ」という鮮魚直販事業であった。仙台を中心に会員を募集し、月に2回、唐桑で獲

れた新鮮な魚介類をその日のうちに直接自宅に届けるという試みである。小量で漁協を通らない魚を数軒の漁師から仕入れ、「今日の魚はこのように食べればおいしい」という「お魚通信」と一緒に届けた。リンゴの季節には唐桑産のリンゴも入れ、旬の時期にはカツオやサンマを市場経由で仕入れて配送した。お魚クラブは開始早々から会員数を増やし好評を得たものの、会員数が増加しすぎ2台の保冷トラックでは物理的に対応できなくなった、唐桑で獲れる魚種が思ったほど多くなく市場経由にて魚を調達しなければならなかったこと、仙台まで片道3時間という距離のため、通販事業を継続し2年間で終了せざるを得なかったとのことである。現代の惣菜や肉・野菜などの宅配ビジネスの先駆けと評価できる。

さらに、1テーマ1マップの方針のもと「唐桑探訪マップ」が作成された。これは長い歴史の中で蓄積してきたさまざまな地域の宝物にスポットを当て、それを一つひとつ丁寧に掘り起こしていく活動で、①お参詣マップ、②唐桑御殿マップ、③唐桑人物マップ、④唐桑濱マップ、⑤唐桑国際交流マップのマップが作成された。これは、地元の人々が自ら情報を整理することにより唐桑について再認識する過程でもあり、これらのノウハウが唐桑町民の意識改革やコミュニケーション強化とともに将来の唐桑まちづくりに役立つと考えられる。

唐桑の人たちの特徴を一言で表現するなら、チャレンジ精神が旺盛であることである。その一方で伝統的な郷土芸能や習慣などをしっかり残している。石山修武氏は、アフリカのカナリア諸島や北米・南米の沖合まで出かけていく漁師たちは赤裸々で正直、「げた履きの国際人」と評している。自宅には海外で購入した品物が並んでいるという。遠洋漁業の乗り組みという仕事柄、パスポートの取得率が高く、銀座は知らないがシドニーには行ったことがある。巷間、コーヒーの飲用率は日本一ともいわれている。

(3) まちづくりの基礎となった地元学

1980代後半にまちづくりブームが到来し、各地でさまざまなまちづくりが行われたが、それぞれの理論的な基礎となった地元学について、地元学・地域学ホームページでは図1のように整理している。

図1；地元学と呼ばれる分野



地元学・地域学HPより <http://green.mond.jp/jimotogaku.html>

地元学と呼ばれる分野は、①考現学的なアプローチ、②文化発掘という視点からのアプローチ、1880年代後半に唐桑のまちづくりを支援した結城登美雄氏に代表される③民族学的アプローチ、からくわ丸の若者が指導を受けた吉本哲郎氏の④地域づくりという視点からのアプローチの4つの流れを紹介している。

からくわ丸を指導した吉本氏⁷の地元学は、「ないものねだりをやめてあるものを探す」、「地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立てる」というもので、水俣病で苦しんだ人たちが、住民協働で環境に特化した活動を通じ元気を取り戻す過程から生み出されものである。それぞれの風土や暮らしによりすすめ方は異なり、これといった決まった方法はなく、土地と人に合わせて開発していくもので、この過程を通じて大地と人と自分に対する信頼を取り戻し、自分たちでやる力を身につけていくというものである。

それに対して、結城氏⁸の指導の特徴は、唐桑臨海劇場での芝居のために、黒テントの劇団員と地元の出演者がまち歩きにより取材した話題を、ワークショップを通じ物語を創るという過程があげられる。したがって、演じられるテーマはごくごく身近な話題から、江戸時代へのタイムスリップに宇宙人の登場など荒唐無稽とも思えるストーリーの中で、大漁唄い込みや七福神舞、浜甚句などの郷土芸能が演じられるという、現在の郷土芸能劇「唐桑ものがたり」の原型が出来上がったともいえる。さらに劇場は、鉄パイプで組み立

⁷ 吉本哲郎：地元学ネットワーク主宰、1971年宮崎大学農学部卒業後2008年まで水俣市役所勤務、水俣病問題で苦しんだ水俣の住民と協働で環境に特化し活動し地元学を提唱。
⁸ 結城富美雄：民俗研究家、山形大学卒業後、広告デザイン業界に入る、現在山形芸術工科大学教授、2004年芸術選奨文部科学大臣賞受賞（芸術振興部門）。

てるといふ安易な方法ではなく、町内 10 ケ所の竹林の所有者の了解をとりつけ、3 班に分かれて若者が竹を切り出す。それを組み立て、浜のお母さんたちが縫い合わせた大漁旗を壁と天井にして、手造りの劇場は完成する。

結城氏のまちづくりは、表 5 にもあるように、19 歳から 38 歳まで年齢や職業が異なる人たちに支えられていることが特徴である。このようにたくさんの人を巻き込むということは、これまでの唐桑でのつながりに新たな出会いやつながる場を提供していることにもつながっていたと考えられる。さらに、「一流の評論家より三流の実践者たれ」という指導の賜物か、まちづくりカンパニーでは失敗したものの、成果物としてのマップが残され、唐桑オルレ⁹のコースの検討にあたっては、お参詣マップや唐桑御殿マップを参考に、コース案を 2 通り選定し、翌週には皆でコースを歩き検討会を実施するなど、前期高齢者の実行スピードには驚くばかりである。

からくわ物語の若者が快く迎えられたのはボランティア活動に汗を流したからだけではなく、唐桑の人たちがこのようなまちづくり活動を体験していたことも大きいのではなからうか。地元学は、こうすればこうなるというハウツーではなく、何かを一緒に創り出す体験そのものであるということか。

3. 唐桑町まちづくり協議会

唐桑地区は、まちづくり協議会が発足し地域の自立に向けて活動を開始した。特徴的なのは、震災からの復興支援で住み着いた若者たちが、地元の若者たちと作ったからくわ丸のメンバーが主要な活動をリードしている点である。そして、2018 年の総会で、市議員 4 名に加え、筆者もアドバイザーとして参画することとなった。本章では唐桑まちづくり協議会の構成と課題、若者から提案のあったプロジェクト方式の採用と、まちづくりに必要な暗黙知と形式知について検討を行う。

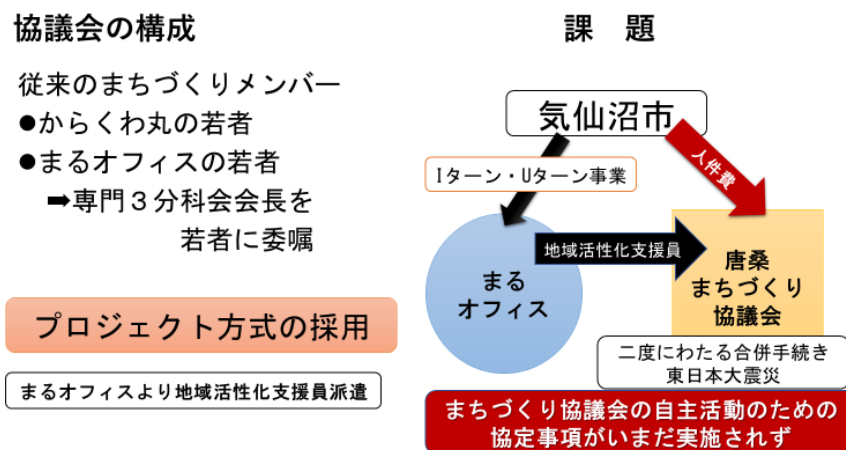
(1) まちづくり協議会の構成と課題

唐桑まちづくり協議会の構成で特徴的なのは。産業分科会、福祉・子育て分科会、地域教育分科会の 3 つの専門分科会とも、からくわ丸とまるオフィスのメンバーが部会長に就任している。これは、唐桑地域の住民の若者世代への期待の大きさと理解すべきである

⁹ 韓国・済州島にある本部が主宰し、「家に帰る細い道」の意味。自然や歴史を楽しみながら歩くトレッキングコース。九州オルレは 2012 年に佐賀、熊本、大分、鹿児島 の 4 県に四つのコースが誕生し、その後九州を中心に広がる。唐桑のコースは、宮城オルレ唐桑コースとして 2018 年 10 月 7 日に開設式を行う。

う。さらに、特徴的なのは、次節で詳述するが若者世代の提案により、3つの専門分科会のほかに7つのプロジェクトが活動している点である。

図2；唐桑まちづくり協議会の構成と課題



筆者作成

ただし、課題として指摘しておきたいのは、まるオフィスは気仙沼市よりIターンやUターンなどの移住促進事業を受託し一定の収益を上げる仕組みになっているが、まちづくり協議会には、気仙沼市より地域活性化支援員の人件費相当額の補助があるが、支払い後の残額については市に返還する仕組みとなっており、自主事業を行うための資金を持っていない点が指摘できる。これは、気仙沼市の合併の経緯と課題が解決される前に震災が襲ったことが大きな要因ではあるが、「協働と参加による自立した社会をつくり、安心して豊かな暮らしを大切にする風土と心を育みます」という市の掲げた方針と整合性がないのではないかという点を指摘しておきたい。震災からすでに8年目に入っている。すべての地区や制度が同時に進行するとは考えにくい。復興の理念を共有しながら、それぞれの地域が独自に発展していくことが復興の現実でなかろうか。

さらに、気仙沼の地域活性化支援員の採用はNPO法人ETICが東京での一括採用を市から委託されており、どのような人材の派遣を求めているかなどについて、まちづくり協議会との事前の意見のすり合わせがなかった点についても指摘しておきたい。本年度については採用していた地域活性化支援員が出産と育児のため休暇をとり、インターンでまるオフィスが受け入れた学生を採用している。ただし、親からの扶養の限度内での勤務ということで週3日、残り2日間をまるオフィスのメンバーが勤務との変則体制となっている。双方の合意とはいえ、不自然な勤務体制であり、このままの勤務体制では双方に不満が残

る結果となりかねず、明年度に向け建設的な話し合いがなされること希望する。

(2) プロジェクト方式の採用

唐桑まちづくり協議会では若者たちの提言により、表5のようなプロジェクトがすすめられている。内容は、からくわ丸がこれまで取り組んできた内容が主であるが、からくわでマルシェやオルレを歩こう、さくらの植樹などのプロジェクトなど高齢者からの提案なども含まれている。最も特徴的なのは、表5の上の3つのプロジェクトについては、企画に至った背景やプロジェクトを通じて達成したいこと、工夫する点などが詳細に述べられていることである。からくわ丸がこれまで取り組んできた事業であり、実現性が高く効果が期待されるプロジェクトと考えられる。

また、これらのプロジェクトについては、実施のための予算措置が講じられるべきであり、第1節でも指摘した通りまちづくり協議会に事業予算が配分されていないのがネックとなっている。たとえば一関市で行われている公民館のまちづくり協議会への指定管理による委託など、自主的に活動できる財源の確保が自立的活動へのヒントとなると思われる。気仙沼と唐桑が合併して10年が経過するが、途中で本吉町との合併や東日本大震災があったにしても、いささか遅いのではないかと思われる。

さらに、唐桑の高齢化率¹⁰から判断して「生きがい（死にがい）」についてのプロジェクトが不可欠ではなかろうかという点を指摘しておきたい。若者からは提言しにくい問題とは思いますが、高齢者の生きがいは幸福感につながる問題でもあり、同じような課題を抱える地域の参考になるのではないだろうか。

表5：唐桑まちづくり協議会のプロジェクト一覧

プロジェクト名	プロジェクトの概要	プロジェクト運営体制他
子どもと歩こう	小学生の登校の安全確保とシニア世代の健康づくりと多世代交流	旧福祉・子育て分科会メンバー、唐桑小学校、からくわ丸、地域の方々
地域協育の拠点づくり	中高生と一緒に学びの場（スペース）づくり	旧地域教育分科会メンバーが主
浜のまちがっこう	地域の小中学生対象 地元の魅力あふれるプログラム提供	旧地域教育/産業分科会メンバーがからくわ丸、penseaと

¹⁰ 2014年気仙沼市高齢福祉課よりの提供資料によると、高齢化率は中井地区38.38%、唐桑地区38.80%、小原木地区39.70%、全体で38.83%、高齢者の一人暮らしは300世帯となっている。

	(29年度1回開催)	連携
からくわでマルシェ/ オルレを歩こう	今年度中に具体的な企画案を立案	未定、29年度「小原木を歩こう」実施
さくらの植樹	福祉の里へ桜植樹 植樹イベント	事務局が馬祥会と打合せ
からくわの〇〇ゼミ	地域の中高生が、半日間地元生産者の元で仕事体験し「くらしがい」「はたらきがい」に直接ふれる	事務局-有志で実施メンバーを構成、まるオフィスとの共催
まちづくり発表会	唐桑でまちづくりに意欲的な若者たちが、地域住民向けに思いや取り組みを発表	事務局-有志で実施メンバーを構成

出典：平成30年度唐桑町まちづくり協議会総会資料より筆者作成

また、各プロジェクトの記載内容について表6のように整理してみた。それぞれのプロジェクトごとに、何らかの記載のあるものには○を、記載のない項目についてはグレーの網かけをしてみると、からくわでマルシェ/オルレを歩こうのプロジェクトに空欄が多いことが指摘でき、記載内容も極めて簡素である。まちづくり協議会の承認があつてのプロジェクトであり協議会の中では問題はないと思われるが、プロジェクトを実施するメンバー内での議論を整理しプロジェクトの内容につき、再確認しておく必要があるのではないかと考える。次節では、これらのプロジェクトについての共通の理解と成功に導くために必要な多様な世代と組織内における、暗黙知と形式知の重要性について検討する。

表6：プロジェクトの記載項目（記載のある項目は○）

プロジェクト名	発案分科会	企画に至った背景	プロジェクトの概要	達成したいこと	プロジェクトを通して工夫する点	プロジェクト運営
子どもと歩こう	○	○	○	○	○	○
地域協育の拠点づくり	○	○	○	○	○	○
浜のまちがっこう	○	○	○			○
からくわでマルシェ/ オルレを歩こう	○		○			○

さくらの植樹			○			○
からくわの○○ゼミ		○	○	○	○	○
まちづくり発表会			○	○		○

出典：平成30年度唐桑町まちづくり協議会総会資料より筆者作成

(3) 暗黙知と形式知の視点から

マイケル・ポランニー(1966)は「我々は語れる以上のことを知っている」¹¹とし経験を積極的に組織化・体系化することで知識を創っていくとしている。言葉や数字で表現できる知識は、知識全体の氷山の一角という言葉に象徴されるように、表面に出ているのは人の知のごく一部であると指摘している。これに対し野中・竹内(1997)、ポランニーの「暗黙知」に対する「形式知」の概念を提唱し、企業における知識経営、すなわち「ナレッジマネジメント」の重要性を提唱した。

これは、まちづくりにおいても援用できる重要な概念であり、前節でプロジェクトの記載項目の一覧を提示したのも、このためである。つまり、個人もしくはグループ内では共有されていても、組織全体には認知されていないことはあり得ることであり、特に多世代で構成される唐桑まちづくり協議会においては重要なポイントとなる。表7に示したように、暗黙知は個人に属する経験知であり、これを組織内に理解してもらうには、記述された誰にも理解できる形式知にしなければならない。つまり、プロジェクトの項目について文字で記載することが、初めてまちづくり協議会メンバーの共通の理解につながるようになる。

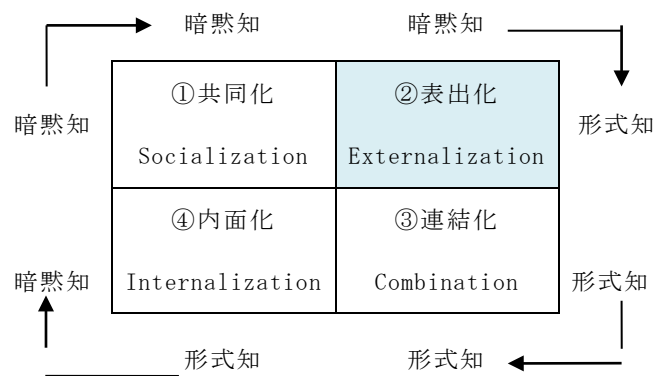
表7：形式知と暗黙知の比較

暗黙知	形式知
主観的な知(個人知)	客観的な知(組織知)
経験知(身体)	理性知(精神)
同時的な知(今ここにある知)	順序的な知(過去の知)
アナログ的な知(実務)	デジタルな知(理論)

出典：野中・竹内1997, p. 89より

図3：組織の知識の変換モード

¹¹ マイケル・ポランニー1966, p. 4



出典：野中・竹内 1997、P93

野中・竹内（1997）は、図3に示したように①個人の暗黙知からグループの暗黙知を創造する「共同化」、②暗黙知から形式知を創造する「表出化」、③個別の形式知から体系的な形式知を創造する「連結化」、④形式知から暗黙知を創造する「内面化」の4つの知識変換モードで説明している。共同化はグループにおけるプロセスや組織文化に関連し、連結化は組織の情報処理パラダイムに根ざし、内面化は組織学習と密接に関連しているとしているが、表出化についてはこれまで無視されてきたとしている。たとえばトヨタの改善活動に基づく作業標準書作成の過程はまさに、暗黙知を形式知に変換する表出化の過程に相当し、匠の技の伝承は共同化の過程に相当すると考えられる。

唐桑まちづくり協議会の年齢が多様な年齢で構成されており、それぞれのメンバーの暗黙知をまちづくり協議会全体の暗黙知にする過程が重要であり、そのためにもプロジェクトの企画についてはもれなく記載しメンバーに提示することが重要であることを指摘しておきたい。時には、高齢者がからくわ丸のメンバーの指導を受け、プロジェクトの企画書につき作成することも必要ではなからうか。これがトヨタの作業標準書作成の過程であり、この過程を経ることにより自分たちのプロジェクトに対する理解も深まり、他のメンバーの理解が得られ、協力が得られると考えられる。しかも、若者と高齢者のコミュニケーションが深まり、少子高齢化と過疎化に悩む地域の処方箋にもなりうる重要なポイントであると考えられる。

おわりに～信頼と共感による復興

数年前に、団塊の世代が退職した際に、ベテランが持つ技術という暗黙知を後継者にどのように引き継ぐのか、ベテランの技は「カン」や「コツ」としてその個人の内部にとどめられており、あまり明示されていない。ベテランは自分の仕事を進めるために技術・技

能・知識を学び、長年にわたり改善に改善を重ねて工夫してきたが自らの技能やノウハウについての「カン」「コツ」などの感覚（五感）や要領についての重要なポイント等は一般に記述されていないか、記述されていてもその内容について他人が実施した場合の再現性はあまり高くないということが指摘された。

2018年6月11日の唐桑まちづくり協議会総会に参加し、3人の若者が分科会の会長を引き受け、これまで形式的に分科会の報告で終わる総会がプロジェクトの紹介という新たな手法の採用で、大きく変わる可能性を実感した。高齢者の提示したプロジェクトの整理につき、からくわ丸の若者たちに教えを乞うてはいかがだろうか。プロジェクトの企画書を整理する過程で、双方の暗黙知の交換をし、協働で形式知を創り上げることとなる。この過程を経て、双方の信頼や共感が高まり、プロジェクトの成功を通じ信頼や共感がさらに高まることが期待される。

現在、唐桑では住民対象のアンケート調査の検討が進んでいる。上述の通り、事業予算の制約条件のある中での実施であるが、唐桑支所の職員が手分けをして調査票のインプット作業を支援しようとの意向が示され、配付については広報誌の配布などの協力を得ている各地区の自治会に依頼することとし、分析については同志社大学の幸福感研究チームが引き受けることとなった。現在、まちづくり協議会の中でアンケートの内容や世帯に配布した場合は高齢男子の回答が多いことが経験的にわかっており、世帯に配布したうえで若者の意見を多数回収するにはなど、実施についての具体的な検討が始まっている。アンケートの結果も重要ではあるが、多様な主体の協働もよるこれらの活動を通じて形成される信頼と共感こそが震災からの復元力であり、コミュニティのイノベーションにつながるものと期待している。

以上

参考文献

アンドリュー・ゾッリ、アン・マリー・ヒーリー著、須川綾子訳『レジリエンスー復活力』、ダイヤモンド社、2013年。

D-P-アルドリッチ著、石田拓・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割りとは何かー地域再建とレジリエンスの構築』、ミネルヴァ書房、2015年。

マイケル・ポランニー著『暗黙知の次元ー言語から非言語へ』紀伊国屋書店、1966年。

石山修武著『世界一のまちづくりだ』、晶文社、1994年。

佐々木雅幸、川井田祥子、萩原雅也編著『創造農村—過疎をクリエイティブに生きる戦略』、学芸出版社、2014年。

早田宰、加藤基樹、沼田真一、阿部俊彦編著『ともに創る！まちの新しい未来—気仙沼復興塾』早稲田大学出版部、2013年。

袖井孝子著『「地方創成」へのまちづくり・ひとづくり』、ミネルヴァ書房、2016年

西村幸夫編『まちづくり学—アイデアから実現までのプロセス』朝倉書店、2007年。

野中郁次郎、竹内弘高著『知識創造企業』東洋経済新報社、1997年。

林 良嗣、鈴木康弘編著『レジリエンスと地方創成—伝統地とビッグデータから探る国土デザイン』、明石書房、2015年。

山田晴義編著『地域挿絵のまちづくり・むらづくり』ぎょうせい、2003年。

結城富美雄著『山に暮らす海に生きる—東北むら紀行』無明舎出版、1998年。

参考資料

唐桑商工会『唐桑町商工会地域ビジョン作成事業報告書—唐桑ものがたり—10年計画』、1989年。

唐桑臨海劇場実行委員会『'88唐桑臨海劇場』、1988年。

唐桑臨海劇場実行委員会『'89唐桑臨海劇場』、1989年。

唐桑商工会「からくわ探訪シリーズ① 唐桑御殿」

唐桑祥子会「からくわ探訪シリーズ③ 唐桑浜ものがたりマップ」

唐桑商工会「歴史の中の唐桑浜ものがたり」

地元学・地域学 HP <http://green.mond.jp/jimotogaku.html>